

## 育てる漁業

海でとれる魚の量がへってきたことから、日本では、魚を「とる」だけでなく、「育てる」漁業にも力を入れています。育てる漁業には、栽培漁業と養殖業の二つがあります。

栽培漁業では、たまごから育てた魚の子どもを、ある程度の大きさになるまで、人が水そうなどで守り育てます。そして、海や川に放流します。魚は、自然の中で大きく育ち、それをとるのです。魚の一生の中で、いちばん弱い時期を、人が守ってあげるわけです。

いっぽう、養殖業では、魚を、海の中に作ったいけすなどで、食べられる大きさにするまで、人がえさをあたえて育てます。そして、そのまま出荷します。

どちらも、魚を人の手で育てることは同じですが、育てた魚を、自然の海に放流するかどうかが、大きなちがいです。

栽培漁業で放流される魚には、ヒラメやマダイなどがあります。また、養殖業では、ブリやマダイ、のり、カキなどが育てられています。どちらも、海の資源を守りながら、わたしたちの食卓に魚をとどけるためのくふうなのです。

1 日本で、育てる漁業に力を入れるようになったのは、どうしてですか。

海でとれる魚の量がへってきたから。

2 栽培漁業で、人が魚を守るのは、どんな時期ですか。

ア いちばん弱い時期

イ いちばん大きい時期

ウ たまごをうむ時期

3 養殖業では、魚をどこで育てますか。

海の中に作った

いけす

など

4 栽培漁業と養殖業の、大きなちがいは何ですか。

育てた魚を、自然の海に放流するかどうか。

## おうちの方へ

- 二つの漁業を表にして、「どこで育てるか」「放流するか」をくらべるとよく分かります。